新型コロナ感染症クラスター発生

2020 年春にコロナウイルス対策が始まり、当初は「入居者さんたちの命と暮らしを守る！」という強い緊張感で毎日を過ごして来た。しだいにこの感染症のことがわかり、ワクチン接種も始まり、徐々に家族の面会やレクリエーションも感染の波に合わせて対応することができるようになった。しかし 8 月、突然グループホームえんで感染が爆発した。入居者 9 人のうち 8 人が陽性、1 名は陰性だが発熱や咳などがあり「みなし陽性」として対応、スタッフも 9 名のうちの 8 名とデイホームえんスタッフが 1 名陽性になった。

入居者たちの症状は多くの方が軽症で、熱も一両日で下がり、咳も数日で収まった。一方スタッフはもう少し重く、高熱の後、咳と倦怠感に長く苦しんだ者もいた

しかし 1 名の入居者が、症状が悪化して入院され、コロナは陰性になった後亡くなられた。92 才で最近は老衰も進んできていた方だが、コロナに感染しなければもっと穏やかな最期が迎えられたかもしれないと悔いが残る。

8 月初旬の最初の陽性者の発生から、最後の感染者が療養解除となるまでの約 3 週間、デイホームえんをはじめ法人内他事業所のスタッフの協力で何とかケアを継続することができた。

この間、スタッフ全員が保健所とは繋がらず、医療機関での受診も出来なかった。入居者は主治医から保健所へのルートがあり、すぐに連絡は来たのだが、症状が軽いと入院は受け付けてもらえず、「認知症がある方をこの施設で隔離することは不可能」と説明しても、「各室に施錠してはどうか」と言われた。保健所の職員たちは休日返上で業務に取り組んでいたに違いなく、精いっぱいのアドバイスだったのだろう。また、救急隊員の方たちや、在宅酸素の会社のスタッフの誠実な対応に救われた。だがそれは点のままでつながらず、野火が燃え尽きるのを待つような対応をせざるを得なかった。

積極的な広報がされていなかったので療養解除後になってしまったが、埼玉県看護協会の感染管理認定看護師とグループホームえんの見取り図を見ながらの「感染対策予防相談」を受けることができた。感染対策やゾーニングなどの対応は考えてあったが、第 7 波の感染力の強さでは、いったん感染が始まったら止められなかったこともよく分かった。

想像もしたくないが、必ずあるという新たな感染症に備えて強力な対策を世界中で練ってほしいと強く願う。

（グループホームえん／井上暁子）